

二〇二〇年度都市史学会大会（オンライン）プログラム

日時 二〇二〇年二月一九日（土）・二〇日（日）
会場 オンライン会議システム Zoom ミーティング（総会）／Zoom ウェビナー（研究発表・基調講演・シンポジウム）
申し込み 都市史学会ウェブサイト上の専用フォームより申し込み登録。

参加費 無料

大会実行委員会 都市史学会企画委員会（大会実行委員長＝勝田 俊輔）

主催 都市史学会

お問い合わせ 都市史学会大会実行委員会 convention2020@suth.jp



・12月19日（土）

13時00分～14時00分 《都市史学会総会》（会員のみ） ※12時50分からアクセス可（Zoom ミーティング）

14時30分～16時00分 《研究発表》 司会＝吉澤 誠一郎（東京大学） ※14時20分からアクセス可（Zoom ウェビナー）

人口密度と浴場から考える古代都市ローマと疫病＝堀 賀貴（九州大学）

11世紀ヨーロッパ中世の都市の誕生における贈与と聖性の問題

―阿部謹也とG・バタイユを媒介にして―森 亘（京都大学）

東北の町家の類型化と都市建築としての評価＝温井 亨（東北公益文科大学）

・12月20日（日）

10時00分～11時30分

《基調講演》 With コロナ時代の羅針儀―都市と感染症―＝山本 太郎（長崎大学熱帯医学研究所）

司会＝伊藤 毅（青山学院大学・東京大学名誉教授） ※9時50分からアクセス可（Zoom ウェビナー）

13時30分～17時30分

《シンポジウム》 疫病と都市 司会＝勝田 俊輔（東京大学） ※13時20分からアクセス可（Zoom ウェビナー）

二〇二〇年現在、新型コロナウイルス感染症は、世界の各地でとりわけ都市において猛威をふるっている。ただし疫病と都市の結びつきは決して新しい現象ではなく、歴史の上で大きな被害を出した疫病の多くは、都市を主な舞台としてきた。また疫病と都市の結びつきのあり方も、人間の往来や集中が感染機会の拡大をもたらし、という単純な図式にはとどまらない。疫病は歴史の大半を通じて原因不明の現象であり、このため疫病との戦いには都市のあらゆるリソースが動員された。ここには、平時では明らかにならない都市のさまざまな側面―空間構成・社会結合・権力秩序・文化表象など―を読み取ることができると言える。また逆に、都市のこうした諸側面が、疫病に対応する過程で形づくられ、つくり変えられてきたとも言える。疫病と都市の結びつきからは、多様な論点を抽出できるはずである。

疫病は、都市を物理的に破壊することはないにせよ、災害の一種である。三・一一以降、都市と災害の関わりの問題が都市史研究において急速に関心を集めつつあり、他方で疫病研究は、医療史研究のうちでもっとも豊かな蓄積をもつと言える。本シンポジウムは、中近世・近代の日本、前近代の中国、近代のイギリスをフィールドとする報告と、建築史からのコメントをもとに、疫病と都市の結びつきを検討することで、都市史研究の近年の動向に寄与することを試みる。

13時30分～13時40分 趣旨説明＝勝田 俊輔（東京大学）

13時40分～14時15分 日本中世の都市と疫病＝高橋 慎一郎（東京大学）

14時15分～14時50分 清末の中国都市における天然痘対策＝曹 貞恩（慶熙大学校）

15時00分～15時35分 近代都市と「衛生自治」―「貧民部落」をめぐる―＝小林 丈広（同志社大学）

15時35分～16時10分 都市における疾病流行への認識―ヴィクトリア時代ロンドンの場合―＝永島 剛（専修大学）

16時10分～16時30分 コメント＝初田 香成（工学院大学）

16時40分～17時30分 討論